

2016年9月11日礼拝メッセージ

主題：自由とは何か

聖書箇所：1コリネ3章、創世記37：1-11、詩篇35：1-10

先日、リオオリンピックが終了し、現在パラリンピックが行われています。私はかなりのオリンピックマニアで過去のオリンピックを結構覚えています。今ではだいぶ廃れてしまいましたがかつて日本はバレーボール王国でした。東京オリンピックは男子銅、女子金。メキシコでは男女ともに銀、ミュンヘンでは男子金、女子銀、モントリオールでは男子4位、女子金でした。今でこそ金メダルを取れば、報奨金がもらえる時代ですが、当時は選手全員アマチュアです。陸上で金メダルを取ったアメリカ人選手がプロ野球でお金をもらったことがあったというだけで金メダル剥奪という強烈な時代でもありました。選手たちはただメダリストという名誉のためだけに日々努力していたのです。有名になることによって多少仕事にいい影響はあったかもしれませんが、しかし、金銭のためでなく、そして自らの意志によって、敢えて生活を制限し、時間を使い努力を重ねたのです。彼らは自らの自由を、オリンピック金メダルと言う目標のために集約していったのです。

さて今日の聖書箇所は、私たちがイエスを信じる時にどれほど素晴らしい自由を得られるか、と同時にその自由はどのように生かされていくのか、を示してくれていると思います。

それを考えるために、まずこう問いましょう。あなたは自由ですか？どのように、そしてどの程度自由ですか？ある人は言うでしょう。私は自由ではない。働かなくてはいけないし、家族を養い、お金も自由に使えない。またある人は言うでしょう。自分の時間がありません。育児に掃除、洗濯、お料理と家事に追いまわられています。さらに学生ならば、校則があります、決まった時間に一日何時間も座って先生の話を聞き続けなければなりません、と言うかもしれません。ではどうなったらわたしたちは「自由だ」と言えるのでしょうか。好きなときに寝て、好きなときに働き、食べたいものを食べて、勝手気ままに過ごすことですか。あなたには何の責任もありません。自由勝手です。これが自由でしょうか。ある人にとってはそれでオーケーでも、ある人にはそれが苦痛に感じます。なぜでしょうか。人には「認められたい」という思いと誰かに対して、または何かに対して責任をもって「関わりたい」という思いが両方あるからなのです。「認められたい」思いが強すぎたり、「関わりたい」思いが強すぎたり、人によってバランスは違うかもしれません。しかし、両面があるのです。この両方の思いを満たすためには「愛の関係」があるかどうかが鍵だ、と言ってもいいのではないのでしょうか。ではあなたに愛はありますか。答えはイエスです。主にあって、信じるものにはすでに愛が与えられています。

聖書はなんと言いますか。1節「御父はどんなに素晴らしい愛を与えてくださったことでしょう。」既に私たちには父の愛が与えられています。そして12節までにこのイエスに連なって私たちには何の罪も認められないと言うことが繰り返して出てきます。さらには神の種=愛の種もこのうちにあることが高らかに宣言されます。

もはや罪のうちを歩ませようとする悪魔に対して、何の義理も感じることなく、イエスとともに歩むのです。時には罪も犯すでしょう、それでも構いやしません。いつでも悔い改め、立ち返ることができるのです。

これは解放です。罪に縛られていた心が解かれ、自由にイエスに仕えることができるのです。イエスが身代わりに私の罪を負って死んでよみがえってくださったからです。あなたは解放されていますか。もしとらわれていると感じたら、主の元に行ってください。主が解放されます。心配も遠慮も全く必要ありません。あなたは解放されています。自由です。これが「認められる」という愛です。

さてそこで立ち止まって人生を使うのも結構でしょう。今日これ以上詳しく話す時間もないのでこれについては当教会の前牧師、石原良人の本を読んでみてください。

しかし、解放にはその先があります。さあ外側から罪に縛られることはなくなりました。第二の解放があなたを待っています。それが18-20節です。「行いと真実をもって愛そうではありませんか。」ここを読むとことばや口先だけで愛することがいけないことのように聞こえるかもしれませんが、そんなことはありませんことばや口先もうまく使えば相当な力になると思います。でも「行いと真実を使え」と主は言われます。つまりあなたのうちにある主の愛を解放して、ということではないでしょうか。第一の解放は罪の束縛、支配からの自由です。第二の解放は自分の内にある種の愛を、自由勝手に用いることです。こんなことしたらどう思われるかな、とかみんなの迷惑にならないかな、とかいう無駄な憶測を廃して、突き進むことです。多少問題が出るかもしれませんが、それはその時々に対処することにしましょう。

このようにして、私たちの自由をイエスの愛に向けて集約していくのです。このような素晴らしい人生を私たちは享受するのです。

ただしそれにはいくつか覚えておかなければならないことがあります。神の愛を実践すれば、どうなるのか。当然のごとく相手から感謝される、喜ばれる、社会から受け入れられる、まあそういうこともたまにはあるでしょう。しかし、聖書は「世があなたがたを憎んでも・・・」と言います。つまり「憎まれる」ことも多々あるぞ、ということです。伝道、宣教、愛の実践によって「憎まれる」ことになる。まったくもって理不尽な話です。しかし、そうなっても愛の

実践はやめない、いやはや痛快な話です。わたしたちはそのような舞台に立つ特権が与えられているのです。創世記のヨセフは自分と神との関係で、自由に生きていたところ、兄弟たちにねたまれ、疎まれ、奴隷として売り渡されてしまいました。しかし、彼は憎まれたことを乗り越え、兄弟たちを助ける者とされました。

さらに次に何が起きるでしょうか。憎まれるだけではなく、戦いに入ります。ダビデ王は主に従い、その人生を賞賛されました。しかし、主の神殿を造ることは許されませんでした。戦いの人生で多くの血を流したからです。主にあつて自由に生きることは戦いです。もちろんダビデのように血を流すことはあまりないかもしれませんが。それでも迫害、困難、妨害は出てくるでしょう。時には個人的に、時には政治的に、しかし、主がともに戦ってくださいます。ダビデは主君に狙われ、自分の息子に狙われても、戦いの中で憎しみにとらわれることはありませんでした。主によって心を守られました。この世にあつて、私たちが様々な戦いに遭遇するでしょう。しかし、驚くにはあたりません。主もそのようにして、戦い、十字架によって人間の勝利とは全く違う勝利を得、それを私たちに付与されました。

私たちは主にあつて完全な自由人、しかし、それは主の愛につながった節度ある自由人であること、主が何をするにも共にいてくださることを感謝しましょう。